

比屋根均著

『技術の営みの教養基礎 技術の知と倫理』

(理工図書、2012年)

谷口照三

1999年は、「技術者倫理」と「大学教育」の結びつきにとって、エポック・メイキングな年であった。なぜならば、日本技術者教育認定機構が設立され、そこで構築された教育プログラムに技術者倫理が組み込まれたからである。それを契機に、この分野に関する多くの研究書やテキストが出版された。多くの類書があるなかで、『技術の営みの教養基礎 技術の知と倫理』は、つい手取りたくなる、魅力的な書名である。

本書の特徴は、むしろ「書名」のみではない。まず指摘しなければならない点は、著者その人であり、彼の立ち位置である。著者は、ほぼ20年間大手の企業に勤めた技術士であり、また、技術者教育、技術論研究を使命とした個人事務所を立ち上げた人でもある。そして、彼は、本著出版の6、7年前から、日本技術士会中部支部の「技術者倫理研究会」の創設メンバーの一人として、また幾つかの大学の「技術者倫理」担当の非常勤講師として研究、教育にも重要な役割を担ってきた。さらに、本書執筆時、大学院の後期博士課程に在学し、哲学および技術論の研究に従事していた。本書は、「このようなキャリアの持ち主は、なるほどこのような本を書くのか」、とつい納得してしまう「雰囲気」、否それのみでなく独特の「リズム」と「プロセス」をもったものとなっている。

かかる「プロセス」は、前半(1~8章)の「技術の知と営みに基礎づけられた技術者にとっての倫理的基盤」に関する問題領域から、後半(9章~15章)の「技術者が置かれている社会的文脈における倫理問題」領域への「発展的プロセス」であり、またそれらは重層化した構造となっている。前半の焦点の一つは、科学及び工学の知と技術の知を対比しながら、技術の営みの特徴を「知の統合」、「モノの実現」、「行動のマネージ」、「道具的価値を生み出す」の4点から説明することである。かかる営みには、現実の直視と論理的思考の間との上向きの循環過程における試行錯誤が内

包されている。このことも、重要な論点である。第二の焦点は、かかる営みに必然的に要請される「ミスによる被害の最小化」問題である。後半は、説明責任や義務論、功利主義などの倫理諸学説及び情報倫理、環境倫理、生命倫理に触れながら、専門職としての技術者の社会的役割とそれに関連する法や倫理問題が考察されている。

そして、本書の「リズム」を作り出しているのは、かかる「プロセス」に通底している「現実の問題や学問上の問題に立ち向かう思考トレーニング」を可能とする、記述方式である。本書には、事例50点に加え、41問の質問が用意されている。さらに、たとえば「他人の知恵や力を使えるのも能力のうち」や「“Bad News first!”」といったテーマの下にコラム風に「学習生活と社会人生活の違い」が17件語られている。それは、読者に、あるいは学生に臨場感を与えるに違いない。これらが魅力的なリズムを作り上げている。評者は、経営学を専攻しているが、本書に出会い、まず思い起こしたのは経営学教育の一つの方法である「ケース・メソッド(Case Method)」であった。それは、事例を使い、かかる事例における意思決定の責任者の立場で、問題を分析することにより、問いを見出し、それに応える形で意思決定案を創出し、かつ討論することを通じた教育である。「叡智は教えられないから」(Charles I. Gragg, 1954)、知識と活動を一体化することを目指した漸進的な参加型学習が必要となる。本書を利用すると、「ケース・メソッド」が可能となろう。

最後に、著者に要望がある。技術の立場は、一般的には、「最大多数の最大幸福」を目指す功利主義に親和的であるように思われる。他方、著者も主張するように、技術者倫理の基礎をなす「安全思想」は「被害の最小化」を目指す。かかる考え方は、功利主義的枠組みに収まるのか。それとも、別の視座を必要とするのか。かかる論点をより明示的に展開してほしい。それは、「科学や技術は何のためにあるのか」という哲学的理念を問うことになろう。かかる議論を経ることにより、技術者倫理に関して深みのある語りを拓くことになるのではなからうか。